

留萌地方沿岸におけるニシン漁場用語解説

漁場での呼称	一般的呼称	説 明
アカケツウ	赤毛套	明治から大正年代にかけての衣服。当時は高価で、一般漁夫は手に入らず、親方や船頭級の着るものとされていた、ニシン漁場の衣服。
アカダマ	赤玉	完全に煮沸しない半生のニシンで作られた、魚粕用の搾玉。一玉いくらの請負釜炊の時に見られることがあり良質の魚粕とならない。
アゴアワセ	あご合わせ (網子合わせ?)	雇用された漁夫が、漁場に集い揃った時に行う小宴会的行事。雇用される漁夫の出身地が夫々異なる場合、言葉・習慣等も異なるため、人間関係を整え人の和を図るための大切な行事とされている。
アゴワカレ	あご別れ (網子別れ?)	漁期が終了し、漁夫が帰郷する時の行事(宴会)。この席で九一金(手当~賞与金)の配分が発表される。漁場社会では、別れの宴の言葉として使用されている。
アツノリ	厚乗り	建網で軀網に大量のニシンが入ること。適量以上のニシンが網に入ること。急激に大量のニシンが入ること。
アブラナギ	油凧ぎ	油を流したように海面が穏やかなこと、ベタ凧ともいう。
アミイレ	網入れ	投網すること。または、漁期が終って網を洗い、倉に納めること。
アミオコシ	網起し	ニシンが網に入った(これを「ニシンが乗った」という)時、または船頭の指示で、網の下手(ここを「尻シド」という)から上手に向かって順次手繰り揚げること。
アミオロシ	網おろし	ニシン漁に限らず、漁場の準備が完了した後、漁期前に行う大漁祈願・海上安全祈願のための行事。この行事が終って、海に網を入れる。特にニシン漁場ではこの行事の席で漁夫の役割分担の発表、就業心得等が漁夫一同に申し渡される。近隣の関係者も招待し、盛大に行うのが通例である。
アミサヤメ	網さやめ	揚網した網を、点検しつつ整えておくこと。
アミソメ	網染め	乾燥した柏の皮(前年から準備し、新しいものは使用しない)を叩いて粉にし、大釜で2昼夜程煮て、この汁で網を染め作業。

漁場での呼称	一般的呼称	説明
アミタキ	網をたく	投網しやすいように、順序よく網を船に取り入れ（積み込む）る作業。
アミユイ	網結い	新しい網、または分解保存していた網を仕立てること。
アワコ	泡子	産卵直前で櫛状になってないカズノコ。製品にしても下級品として取扱われる。
アワダ	あわだ	完成された網の足棚・アバタナ・耳苧を除いた網の部分。 〔刺網漁でニシンが掛りすぎてその重みで網が破れた時、「あわだ落ちた」という〕
イカリタテ	イカリ建 (アンカー建)	小型の定置網で、沈子の土俵を使用せず、錨を使って網型を固定し、投網すること。ニシン定置網では、漁期中に暴風で網型を流失したなど緊急に対応しなければならない時土俵の代わりに錨を使用して対応する。これを「イカリ建」という。
イッカドウ	一ヶ統	ニシン定置網（建網）の数の呼称。〔定置網〇ヶ統分の漁夫を収容できる番屋を、〇ヶ統番屋などと呼ぶ〕
オイニシン	追いニシン	凶漁の地域から漁獲のある地域に向いて網を設置、漁をすること。〔ニシンが廻遊魚であるため中場所が不漁の時、北場所に向いて……〕
オオヤケ	大宅	ニシン建網業者（網の親方）の家をいう。裕福な家・資産家・大家などを指すこともある。
オカマワリ	陸廻り	漁場の経験が豊かで、陸・沖の仕事も良く知り陸に居て諸用具の配置、各種作業への対応準備などを進める、漁場の裏方。
オキアゲ	沖揚げ	枠網から大たもでニシンを汲み揚げて汲み船に積み込み、陸又は港に運んで廊下や納坪まで運ぶ仕事。〔漁獲したニシンを廊下へ納めるまでの作業。刺網では網を揚げ、網からニシンを取外し廊下又は納坪へ収納するまでの作業をいう〕
オキアゲオンドウ	沖揚音頭	浜では音頭とか〇〇節などと言わない。漁場関係者以外の人の造語と思う。浜ではタモタテ・キリゴエ・コタタキなどといい、力を結束し行動を一つにする、掛け声であり囃子である。強いて言えば「ニシン場の仕事歌」か？
オキダシ	沖出し	投網のために船が沖に出ること。または、陸から網までの距離。〔例…〇〇の建網は沖出し〇〇間だ。〕

漁場での呼称	一般的呼称	説明
オキドマリ	沖泊まり	漁期間の投網中、保津船は常時、起し船は夜間網に付き船で仮眠する。これを「沖泊まり」という。
オミキアゲ	お神酒上げ	漁期も近づき漁場準備も進んだ頃、大安吉日の日を選んで漁場の親方・仕込親方その他関係者が社に集まり、神主を呼んで大漁祈願を行う。これを「お神酒上げ」と呼び、漁況の占いなどもする。
オヤカゼ	親風	旧暦の1月1日の早朝、自分の漁場の海岸に吹く風。〔その時、吹いている風によって、その年のニシンの豊凶を占う。〕
カイグ	かいぐ	船の側板または船の側板に使用するための板材。
カケニシン	掛けニシン	身欠ニシンを製造すること～身欠ニシンの代名詞。身欠ニシンを製造するため、なや場に掛けたニシン。
カケマワシ	かけまわし	自分の網に未だニシンが乗らないが、近隣の網でニシンが取れている時、船頭が若者を連れて様子を見（偵察）に行くこと。
カスタテ	粕たて	筵に広げ自然乾燥する魚粕を、一日数回筵の片方に寄せて広げ直すこと。〔この作業を「粕たて」という〕
カスタテ	粕建	完成した魚粕を梱包したもの。筵の袋に魚粕を詰めて縄をかけ荷姿にしたもの。
カスダマ	粕玉	ニシンを煮て搾筒で締め固めたニシンの塊（これを「玉」という）。
カスツケ	玉付け	粕玉を玉切り包丁で切り分けその一塊を粕碎きで碎き筵に延し広げる作業。これを「粕付け」ともいう。
カズノコヌキ	カズノコ抜き	昭和10年代からカズノコが高価なため、魚粕を製造するニシンからカズノコを抜き取るようになった。このカズノコを抜き取る作業をいう。
カスマキ	粕巻き	粕倉の中に筵で囲みそこに乾し上がった魚粕を積み筵で覆い約一週間あん醗する（これを「ヤクを廻す」という）。また、野外乾場の片隅で行う漁場もある。これを「いなぐら」とも呼ぶ。
カタイレ	型入れ	網を建てる定位置に、土俵・綱・浮標で網の枠型を作り固定し、この枠型に軀網・手網を取り付ける。この網型を（「台」ともいう）設置すること。

漁場での呼称	一般的呼称	説 明
カマイシ	釜石	建網の親方は、漁期が終了し漁夫が切り上げた後も、通年御用使いをするものを常時抱えていた。この者を「釜石」と呼んだ。（『小平町史』）
カマタキ	釜炊き	ニシン釜でニシンを煮て粕玉を作る作業。〔ニシンを煮て粕玉を作るまでの作業〕
カマバ	釜場	魚粕を作るため、ニシン釜を設置している付近・場所。〔「釜前」とも呼ぶ〕
カワリワク	代り枠	可能量のニシンを入れた枠（枠船）を網から離し、待機している代りの枠船を網の定位値につけること。〔これを「2番枠」「3番枠」などと呼ぶ〕
ガンケ	がんけ	漁夫が親方のことを蔭で呼称する言葉（蔭口）、ガンケ＝鯨のこと。〔鯨は大きく（偉大）で強い。また、時々雇い漁夫（ヤン衆）のところに廻って来て気合を入れる（潮を吹く）からという〕
ガンピ	がんぴ	漁夫が漁場の帳場人を呼ぶ呼称。アイヌ語の「紙仕事～ガンヒモンライキ」「ものを書く～ガンヒヌイ」（番人丹吉蝦夷記）が語源？
キリゴエ	切り声	キヤリともいう。ニシンが大量に乗網し、軀網から枠網にニシンを攻め移す時のかけ声。〔伊勢神宮造営の時の木遣音頭が伝わり変化したものという〕
クイチ	九一金	追いニシン業者が漁場主に漁獲の10%を漁場料として納めた。これを「九一金」といい、出稼ぎ業者が場所請負人に20%を納めた。これを「二八取」と呼んだ。明治10年以降漁獲の9割を漁場主（親方）、1割を漁夫の手当（賞与）として配分したことから、ニシン漁場では手当（賞与金）の代名詞として使用された。
クキ	群来	ニシンが産卵のため大群をなして海岸に近づくこと。〔海面の色を変える程の大群のニシンが海岸近くを回遊すること〕
クキイロ	群来色	ニシンが産卵し、雄の白子（精液）で海面が乳白色に変わることをいう。〔「群来汁」ともいう〕
ケラカカリ	けら掛り	簞の背面のように、網地が見えない程刺網にニシンが掛った状態。〔簞（農漁夫の雨具）を東北地方北部では「ケラ」と呼ぶ〕
ケラケラニシン	けらけらニシン	網にニシンがパラパラと掛った程度。または少量のニシンが乗網したこと。〔「パヤパヤニシン」ともいう〕

漁場での呼称	一般的呼称	説明
コカス	子かす	小さくくずれたカズノコ、乾しカズノコの小さくわれたもの、乾した泡子。
コタタキ	子叩き	網に付着したカズノコを、細いしなやかな棒で叩き落す作業。〔この時の囃子（唄）が、「イヤサカ音頭」（「子叩き音頭」ともいう）である〕
ササメ	ササメ	身欠ニシン製造過程の、ニシンツブシ作業の時、取り去る鰓及び内臓。乾燥して肥料、または魚粕とする。〔これを「ササメ粕」と呼ぶ〕
サシアミ	刺し網	ニシンを網目に刺させて漁獲するための網。〔刺網は建網より規模が小さく、家庭で経営する者もあり、漁獲量も1漁場当り100石内外である〕
サバサキリ	さばさき	身欠ニシンを作るため、ニシンの尾の方から包丁を入れ、背肉を欠き取る。その時使用する鋭利な包丁をいう。〔語源は「鱗裂き」か「捌き包丁」か、またはアイヌ語のマキリから転訛した、「サバキマキリ」かは不明〕
シコミ	仕込み	漁場へ投資することをいう。〔刺網業者は漁業資材・資本金だけでなく、日常必需品も借り受け漁期終了後、漁獲加工品で支払う例が多かった〕
シタキ	したき風	雪又は雨まじりの突風。〔雪まじりの風は沖の舟が陸の方向を見失うので、目印のため浜に火を焚くことから「火焚風」というと聞く〕
シノッチュウ	始納中	漁期の始めから終りまでの期間。〔漁夫の賃金は一始納（ひとしのう）〇〇円と契約した〕
ジャコ又は ジャコシカ	じゃこしか	漁場を渡り歩く流浪の漁夫。〔呑む・打つ・買うで身を持ちくずして漁場で働く漁夫・人夫。悪賢く、人の好意を踏にじる、変り身の早い漁夫。（今田光夫著『ニシン文化史』）〕
シリツナギ	尻繋ぎ	ニシンツブシ人（鰓及び内臓を取り去る作業をする人）の後に控え、つぶしたニシンを薬で作った繋ぎつらに鰓蓋の間から口に通して結ぶ作業。
シンバ	新場	新しく漁場を設定、又は始めて経営する場所。
スシニシン	すしニシン	糠漬ニシン。〔三平汁の材料としても利用される〕
ステニシン	捨てニシン	大時化などで危険を避けるため、枠網の羽交網を解いて網の中のニシンを海中に放出したニシンをいう。〔数日後、海岸数キロにわたってニシンの堤ができることがある〕

漁場での呼称	一般的呼称	説明
セメ又はセメオトス	攻め又は攻め落とす	起し船が尻しど建揚から手繰り、網の中のニシンを魚獲建揚に追い詰め、軀網に結付した枠網の中へニシンを攻め移すこと。〔この時漁夫の力を凝集せしめるためのキリ声（木遣り声）がかけられる。〕
セワリ	背割ニシン	開きニシン。
ソコグキ	底群来	海底で群来て、海面に群来色の表れない状態。
ゾヨザカナ	贈与魚	網を設置した目的以外の魚。ニシン漁場ではニシン以外に網に入った魚は漁夫が沖で自由に食べることが許される。一般には、販売目的以外の魚をいう。
ダイオロシ	台下し	新造船が完成し、造船台から下ろすこと。〔大安吉日を選び、大漁旗・吹流しを立て、神酒・供物を供えて祝事を行う。浜では新しいものをはじめて使用・着用することを、「台おろし」という。〕
ダイリョウハンテン " ホマイカケ " テヌグイ " マメ	大漁絆天 " 前掛 " 手拭 " 豆	大漁のとき、漁夫や人夫に振るまう（支給）品。〔大々漁または大漁で「大漁絆天」、大漁又は中漁で「大漁前掛」、平年漁で「大漁手拭」、その他枠を放し沖揚作業終了時に随時「大漁豆」（落花糖）等が配られた〕
タカナヤ	高なや	身欠ニシンを製造・乾燥するため、ナヤ杭・桁・サキリなどで組み立てられた干場。これを「ナヤ」と呼び、二段造りにしたものを「高なや」と呼ぶ。
タテコミ	建て込み	定置網を海に仕掛ける作業。網台に網を結付敷設すること。
タモタテ	たも立て	枠に入っているニシンを大きなたもで汲み出し、汲み船に移すことをいう。〔この時の囃子を現在では「ソーラン節」または「タモ立て音頭」という〕
ツカミクイチ	握り九一	九一金（手当金）支給の枠から外された者に、親方が適宜支給する手当・賞与。〔親方の情で支給するものもある〕
ツタモノ	蔓物	ニシン漁場で使用するブドウ蔓やコクワの蔓。〔採取する作業を「ツタモノ採り」「ネギオ採り」という〕
ツナウチ	綱打ち	中間縄 8～10本を撚り合わせて太い綱にする。綱は「藁綱」と呼ばれ、この作業を「綱打ち」と呼ぶ。
ツブウリ	粒売り	加工をしないで、生のまま販売すること。陸に揚げず、汲み船から直接、買入船に売り渡すこと（沖売り）。買入れに来る船を「ツブ買船」と呼ぶ。

漁場での呼称	一般的呼称	説明
ツブシ	つぶし	身欠ニシンを製造する原料ニシンから、鰓・内臓・白子・カズノコを取り去り、繋ぎやすいようにする作業。
デバリ	出張番屋	数ヶ統の定置網（建網）を経営し、漁場を数個所に置くと き、本拠地以外の漁場をいい「出張場所」「出張番屋」な どと呼ぶ。
テマドリ	手間どり	鯨沖揚などの時、臨時に雇う人夫。パートタイムで働く 人。〔例年雇用主が決まっている場合「常手間」と呼ぶ〕
トアタリ	とあたり	漁場未経験の新米漁夫、初めてニシン場に働きに来た漁 夫。新参者の意。
トイサシ	問い刺し	刺網業者がニシンの回遊状況を見るために投網すること。 〔漁期中は可能な限り夕方に投網し、早朝に揚網する〕
ドウニシン	胴ニシン	身欠ニシンを取り去った残りの腹側部分と背骨部分をい い、肥料として出荷した。〔地方により「ハシタニシン」 「ドンガラニシン」と呼ぶところもある〕
ドノマ	胴の間	船の中央部分。三半船では、腰当船梁から三の間の船梁ま での間をいう。
ナカイレ	中入れ	魚粕が乾燥した後、乾場の片隅又は粕倉の一部に積み上げ て、藁で囲い発酵させる。この藁の囲いに収納することを 「中入れ」と呼んだ。
ナベチョウ	鍋長	炊事全般についての責任者。〔その日の作業や手間取の人 数、沖揚の状況を把握して、その日の炊飯等を加減する（ 『小平町史』）〕
ナヤオロシ	なやおろし	3・5・7分乾で出荷の場合はナヤに掛けたまま身欠抜き をするが、本乾出荷の場合は胴ニシンに身欠ニシンを付け たままナヤから取りおろす。これを「なやおろし」という
ナヤバ	なや場	身欠ニシンを乾燥するための、杭を立て桁を渡しその上に サキリを並べた施設。この施設を「ナヤ」と呼び、その場 所を「ナヤバ」と呼んだ。（木架＝なや、内田五郎著『鯨 場物語』）
ナヤモチ	なやもち	上記の「なや」が、掛け吊るしたニシンの重みでくずれ・ 倒れ・つぶれること。
ニシンクモリ	ニシン曇り	春先のドンヨリと曇った穏やかな気象状況。

漁場での呼称	一般的呼称	説明
ニシンサキ	ニシン裂き	身欠ニシンを作るため2～3日乾したニシンを、繋ぎつらに連なったまま尾部から頭に向かって背肉を欠き、尾部を連結させて鰓ぶたの一部を付着させて切り離すこと。
ニシンモヨウ	ニシン模様	ニシンが回遊して来そうな海の気配、またはニシンが漁獲されている海の情景。〔使用例＝今晚あたりニシン模様があるべ・〇〇の沖がニシン模様だから支度するべ〕
ネギオ	根ぎ結	建網の型を固定する嬰兒籠・イズコ・土俵・根ダンプ・役ダンプに、網を取り付ける環（これを「玉」または「ダマコ」と呼ぶ）で、ブドウやコクワの蔓を使用した。これを「ネギオ」と呼ぶ。
ノチニシン	後ニシン	当地方では、八十八夜以降に漁獲したニシンをいう。〔魚体も小型で、主として魚粕に製造された〕
ハオイ	はおい	漁夫の作業囃し唄（船漕ぎ・網起しなど）の時、中の一人が導入的音頭をとる。これをハオイと呼ぶ。他の大勢の漁夫がこれに合わせて囃子を唱和する。これを下声という。
ハカイ	羽交う	網と網、網と網を結付する時、容易に解放できるように鎖編にして結合すること。〔枠網は緊急の場合、網の中のニシンを直ちに放棄できるよう3分割し二ヶ所を羽交ってある〕
ハシリニシン	走りニシン	漁期はじめに漁獲するニシンをいう（先に来るの意）。〔その漁場または網で、はじめて漁獲したニシンを「初ニシン」という〕
ハマデク	浜大工	専門の大工職人ではないが、漁場道具の工作に経験を持ち、大工同様の仕事をする人。手先の器用な大工仕事のできる漁夫なども活用され、その期間中「浜大工」と呼んだ。
ハマベン	浜言葉	沖揚時やニシンが群来て網を入れる時など、時間を争って仕事を進める。こんなときは、丁寧な言葉を使っていない。浜で働く人の浜言葉は、簡略化されたものが多い。〔浜弁の例……權＝ケ・大工＝デク・海具＝ケグ・向こうに行け＝アチャイケ・こちらに来なさい＝コチャコイ・按配が良い＝アンビャエ〕
パヤパヤニシン	ばやばやニシン	ほんの少しより回遊しなかったニシンの群。薄漁の状況。網に少しの量より掛らなかつた状態。
バラニシン	バラニシン	生ニシンを箱や籠に詰めないで、バラで売買すること。

漁場での呼称	一般的呼称	説明
バンヤ	ニシン御殿 (ニシン番屋) 番屋	ニシン漁拠点の建築物、「御殿」は戦後の造語。漁場・漁村では通常「〇〇の番屋」と呼称した。また別に「〇〇の元場・〇〇の出張」と呼ぶこともあった。 場所請負人配下の番人がアイヌを使役して漁を営むために出張して滞在した。その建物(家屋)を「番屋」と呼称した。ニシン漁場では多数の雇い漁夫を収容するための建物を一般に「番屋」と呼ぶ。
ヒトハナシ	一放し	刺網は網5把を連結して一放しという。〔5放しを連結して1切といい、投網の単位とした。〕
ヒラヤトイ	平漁夫	役の付かない一般の漁夫(本人に向かって言うことはないが……)。
フナガカリ	船がかり	船泊まりまたは船を海上に繋留すること。(「沖がかり」ともいう)
フナクソ	船糞	船の底に残ったニシン。刺網では船から網を引き揚げる時、網からはずれて船の中に残ったニシン。
ボウズミガキ	坊主身欠	沖揚が出来ず2～3日枠の中でもまれ、鮮度の落ちたニシンで作られた身欠ニシン、または鰓蓋の付かない身欠ニシン。〔ニシンを裂く時、必ず鰓蓋が付くように身欠を作る〕
ホカワリ	外割り	ニシンを二枚に卸して(二枚に割って)乾燥したもの。〔「二本採り身欠ニシン」ともいい、漁夫のお土産・漁家の自家用とされた〕
ホマカス	ほま粕	海岸に打ち上げられたふり子(カズノコ)で作られた魚粕。〔浜に打ち上げられたニシン(寄りニシン)で作られた魚粕を、「ホマ粕」と呼ぶ地方もある〕
マネ	まね	「招く」から転訛したものか? 沖の船から陸への信号・合図・連絡。漁場によって異なるが、昼間は蓑・布・旗などを、夜間は灯火を用いた。
マメウラナイ	豆占い	節分の豆を神棚に供え、その豆をいろいろの灰で焼き、その焼け具合でその年のニシン漁の豊凶・回遊の場所などを占った。〔白い灰になることを良とし、黒く残ることを凶とした〕
マワリオヤカタ	廻り親方	漁期中は漁場に住まいし、漁期が終り製品の処理・出荷が終ると越年漁夫(釜石)を残して、小樽や松前の自宅に戻る親方。

漁場での呼称	一般的呼称	説明
ミガキニシン	身欠ニシン	ニシン加工食品品としての主流をなす製品。ニシンの内臓を取り去り、これを数尾繋ぎ結び、2～3日乾燥後鋭利な包丁で背部の肉を厚く欠き取り、乾燥を進めた乾製品。
ミガキヌキ	身欠抜き	3・5・7部乾で出荷する時はナヤに掛けたまま、本乾出荷の場合は倉に収納して、胴ニシンから身欠部分を引き離すことをいう。
ミガキユイ	身欠結い	抜き取った上記の身欠ニシンを約1週間あん醸（ヤクを廻すと云う）した後、50本または100を1束として結束する作業。
メッキリニシン	目切ニシン	身欠ニシン乾燥中に繋ぎ連（ニシンを繋いだ藁）から落下した（これを「落ちニシン」ともいう）身欠ニシンをいう。〔落ちた身欠ニシンを細い藁縄で繋いで乾す＝こんな仕事しか出来ない、あまり役に立たない漁夫を「目切ヤン衆」と呼んだ〕
モトバ	元（基）場	数ヶ統の建網を経営し漁場を数箇所におくとき、本拠地となる漁場をいう。〔他の漁場は「出張り」（でばり）・「新場」（しんば）などと呼称した〕
モライモッコ	貰いモッコ	手間取（臨時）人夫の賃金として、現物（生ニシン）を支給した。その現物はモッコで〇杯分と計算した。この生ニシンを「貰いモッコ」という。
ヤカタ	屋形	沖泊まりのとき、漁夫の休憩・仮眠のため、船の上にサキリ・早稲・藁を用いて作る仮設の小屋（オガミ小屋）。
ヤク	やく	身欠ニシンや魚粕などの乾燥が終わってから、藁で囲って一週間程伏せて発酵させる。これを「ヤクを廻す」という（あん蒸＝内田五郎『練場物語』）。
ヤクビト	役人	漁夫の中での役付漁夫。〔通常、船頭・下船頭（副船頭）・起し船船頭・船頭手伝い・磯舟乗り・舳係りなどの役職名があった〕
ヤマタテ	山立て	投網したときその網の位置を知るため、陸上の山形や建築物などを標的とすること。〔自分の位置を交点とした交差線の延長上に標的を捉える〕
ヤマドリ	山採仕事	漁期前の漁夫の仕事として、近隣の山に入り漁場で使用する諸用具の材料や樹皮（シナ皮・タモ皮・樺皮など）や、蔓物（ブドウ・コクワの蔓）を採取する作業。〔現地に仮小屋を作り、泊まり込みで行うこともあった。山採作業は主として地元雇用の漁夫が当たった〕

漁場での呼称	一般的呼称	説明
ヤンシュウ	ヤン衆	雇い漁夫のことをヤン衆・雇いとも言うが、漁場社会では侮蔑の意味を含むとして使用されなかった。漁場以外の者が用いた呼称。「漁場では老若を問わず「若い衆・若い者」と呼ぶのが一般的で、「ニシン殺しの神様」などと云うのも漁場関係者以外の者の呼称であろう」
ユキキリ	雪切り	入来後最初の漁夫達の仕事は排雪・融雪の作業で、これを「雪切り」といった。
ヨリコ	寄り子	海草に産卵したカズノコが、時化のため海岸に打ち上げられたもの。
ロウカ	廊下	漁獲したニシンを収納する建物。海岸近くに造られ壁の片方又は妻側の壁の一方は落し板に造られるのが普通で、漁期終了後は船や漁場道具が入れられた。
ロウカアライ	廊下洗い	収納したニシンが、身欠ニシンや魚粕に製造され、廊下の漁獲物が無くなった時に行う祝い事。「漁期間中2度行われることもある」
ワクイキ	杵曳き	充実した杵網を吊るした杵船を時化に備え、また沖揚作業がしやすいよう港内または陸岸近くに動力船や川崎船で曳航する。これを「杵曳き」という。
ワクヲハナス	杵を放す	杵船に吊り下げた杵網にニシンが一杯になった時、軀網から杵船を放し（これを「一番杵」という）、代りの杵船を網に着ける（これを「二番杵」「代り杵」「別杵」などという）。
ワクヲマウス	杵を廻す	杵網は普通杵船に積んでおき、ニシンが網に入った状態を見て、杵船の下に袋状に吊るす。杵網を杵船に取付けることをいう。
ワリドリ	割り採り	山採作業のとき、斧の柄や天秤棒など特に強度や弾力を必要とする材料を、木目を生かして割って採取する方法。